国語 二―一	第五学年及び第六学年の内容 古文・漢文①	年　組　番 名前	取り組んだ日　月　日

現代語訳（例）

枕草子

清少納言

春は明け方がよい。だんだん白くなっていく山ぎわの空が、少し明るくなって、紫がかった雲が細くたなびいているのがよい。

夏は夜がよい。月のころは言うまでもないが、月のない闇夜でもやはり、蛍がたくさん飛びかっているのはよい。ただ一ぴき二ひきと、かすかに光りながら飛んでいくのも、しみじみとしてよい。雨などが降るのもよいものである。

秋は夕暮れがよい。夕日が差して、山にとても近くなったころに、烏がねぐらに行こうとして、三羽四羽、二羽三羽などと、急いで飛んでいく様子までしみじみとしたものを感じさせる。まして、雁などが列を作っているのが、とても小さく見えるのは、たいへん味わい深いものだ。日がすっかりしずんでしまって、風の音や虫の音などがするのも、言い表しようがなくよいものだ。

冬は早朝がよい。雨が降っているのは言うまでもない。霜が真っ白なのも、またそうでなくても、とても寒いときに、火などを急いでおこして、炭を持ち運ぶ様子も、たいへん冬らしい。昼になって、寒さがやわらいでくると、火桶の中の火も白い灰が多くなってきて、よくない。

国語
二―二

第五学年及び第六学年の内容
古文・漢文②

年　組　番
名前

取り組んだ日　月　日

現代語訳（例）

竹取物語

作者不明

昔、竹取の翁とよばれる人がいた。
翁は、野山に分け入って竹を取っては、
いろいろな物を作るのに使っていた。
名前を「さぬきのみやつこ」といった。

ある日のこと、その竹林の中に、
根元の光る竹が一本あった。
不思議に思って、近寄って見ると、
筒の中が光っている。
それを見ると、手にのるぐらいの小さな人が、
とてもかわいらしい様子ですわっていた。

国語
二―三

第五学年及び第六学年の内容
古文・漢文③

年　組　番
名前

取り組んだ日　月　日

現代語訳（例）

平家物語

作者不明

祇園精舎の鐘の音は、「全ての物事は移り変わる」ということを人に思い起こさせる響きがある。沙羅双樹の花のすがたは、いきおいのさかんな者もいつかはおとろえるという道理をしめしている。おごり高ぶる人も長くは続かず、ただ春の夜の夢のようにはかない。強い者も最後には滅びる。まさに風にふき飛ぶ塵と同じである。

※「平家物語」は、平家とよばれる武士の一族が、栄え滅んでゆくさまを書いた作品です。作者は分かっていません。

徒然草

兼好法師

することがなく、たいくつであるのに任せて、一日中、硯に向かいながら、心に次々とうかんでは消えていく、とりとめもないことを、なんという当てもなく書き付けていると、みょうに心がみだれて、落ち着いていられない。

国語　二―四

第五学年及び第六学年の内容　古文・漢文④

年　組　番　名前

取り組んだ日　月　日

現代語訳（例）

おくのほそ道

松尾芭蕉

月日は永遠の時間を通り過ぎていく旅人のようなものであって、来ては去り、去っては来る年々も、また同じように旅人である。（船頭として）舟の上で働いて一生を送り、（馬方として）馬のくつわを引いて年をとっていく人々は、毎日の生活が旅であって、旅そのものを自分のすみかとしている。昔の人の中にも、多く、旅の途中でなくなった人がいる。わたしもいつのころからか、ちぎれ雲が風に誘われていくように、旅心をそそられて漂泊の思いがやまず、（近年は、）海辺の地方をさまよい歩き、去年の秋、川のほとりの粗末な家屋に（帰って、）くもの古巣を払って、しだいに年も暮れたのだった。（しかし、新しい年になると、）春がすみの立ちこめる空のもとで、白河の関（現在の福島県にあった。）を越えたいと、そぞろ神が乗り移って心をそわそわさせ、道祖神が手招きしているような気がして、取るものも手につかない。

もも引きの破れを繕い、かさの緒をつけかえて、三里におきゅうを据える（など旅支度をする）と、松島の月のことが気になるばかりで、（帰れるかどうかも分からない旅だから、）今まで住んでいた家は人に譲り、（弟子の）杉風の別荘に移ったが、

このわびしい草あん（芭蕉あん）も住む人が替わり、

（ちょうど三月でもあり、）ひな人形が飾られる家となることだよ。

表八句を連ね、（記念として、）いおりの柱に掛けておいた。

国語
二―五

第五学年及び第六学年の内容
古文・漢文⑤

年　組　番
名前

取り組んだ日　月　日

現代語訳（例）

春暁

孟浩然

春の心地よい眠りに夜が明けるのも気がつかなかった
外のあちらこちらから鳥のさえずりが聞こえてきた
昨夜は風と雨の音がだいぶ激しかったが
花はどれほど散ったことだろう

絶句

杜甫

水は緑に澄んで白い鳥がいよいよ白く見え
山は青々と色づいて咲いている花はまるで
燃えているようにあざやかだ
今年の春もみるみるうちにまた過ぎてゆく
いつになったら故郷に帰れるだろうか

国語 二―六	第五学年及び第六学年の内容 古文・漢文⑥	名前　　年　　組　　番	取り組んだ日　　月　　日

現代語訳（例）

論語

聞一以知十

一を聞きて以って十を知る。

【訳】

一つのことを聞いただけで、十のことをさとる。

子日温故而知新可以為師矣

子曰はく、

「故きを温めて新しきを知る、以って師となるべし。」と。

【訳】

先生（孔子）が言われた、

「昔のことをじっくりと学んで、そこに新しい考え方を見つけ出すことができれば、人の師となれるだろう。」と。

※論語とは、中国の古代の思想家である孔子と、その弟子たちの言ったことや行ったことを記録した書物。